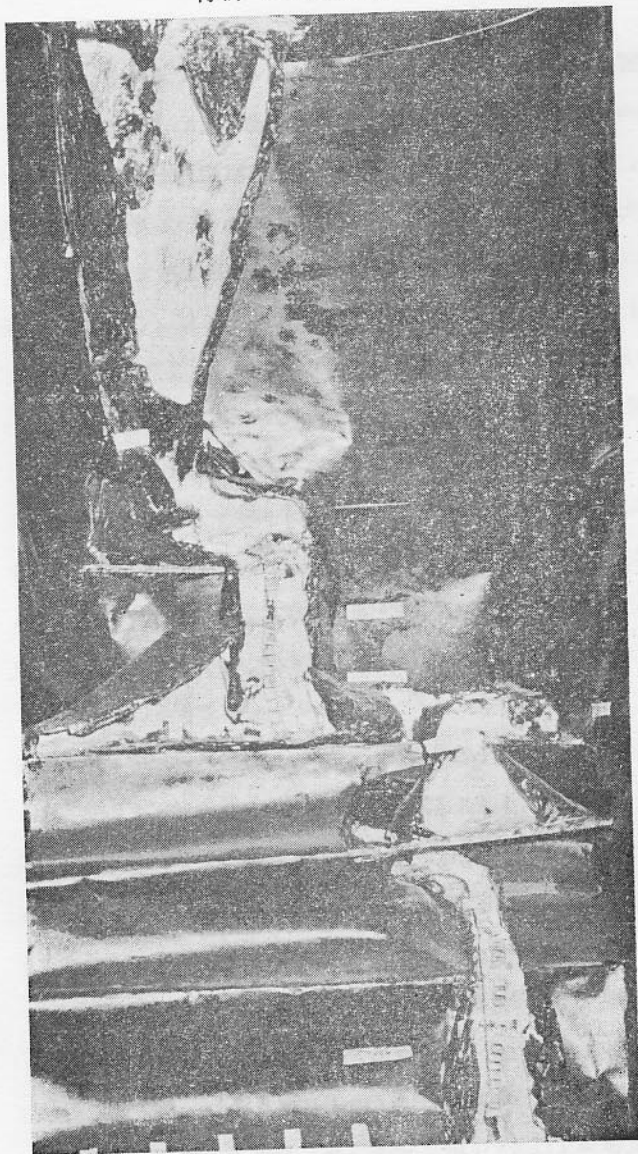


青海千里洞模型



にきれいな層をつくっている。それがドリーネの中にたまって美しい。その向うには、もう沈みかけている太陽があたりの空を真赤に染めている。私の心がその太陽のあたたかい色に安らぎをおぼえ、除々になごんでいくのを、私ははっきりと感じることができる。そして、ついさっきまでの地底旅行を思い返す。耳もとをかすめていった落石、青い光をうけて波打っている大雪溪、しびれるように冷たかった滝の水。その時、その瞬間は苦しかったけれど、今は明るい夕日のもとでこの孤独な仲間たちにその思い出を語り、生への喜びをかみしめるだけである。そして、今この大洞窟の洞口にあるのは、赤い夕日・白い雪・青い空・暗い洞窟、そしてさわやかな思い出だけである。

11. 青海千里洞の洞内名称

梅田雅宏

神秘に閉ざされた世界—未知の世界—との融合を求めてさまよい、我々は暗黒の空間—洞窟—にそれを求める。

「やった。ついにやった」。第3次調査を終え、数日後しみじみと感じる。慶媛大学が大野ヶ

原に於いてつくった216mの日本最深記録を破り、240mの降下に成功。そして地底310m地点まで達した。その後、第4次において370m、第5次405mと次々に記録を更新するに至った。

我々のやらねばならぬ仕事はいっぱいあった。まず過去3回の調査成果をまとめる。それと共に、洞内の主要地点に名称をつけていくのである。そして報告書第1号が出版された。

報告書第1号には、この主要地点の名称を記載できなかった。報告書第2号を発行するに、この名称を示すと共にその名の由来、エピソードをここに記すものである。

「青海千里洞 (OUMI SENRI DO)」

これ迄地元の人々は「小穴 (KOANA)」と呼んでいたが、この洞窟のニュアンスと合わない所以我々は「青海千里洞」と改名した。この名は、洞窟の所在地青海町の「青海」と、我が関西大学のある千里ヶ丘の「千里」を組み合わせたもので、千里というのは、規模が日本の洞窟（堅穴）の中で最大のものであり、千里の果て迄も続くという意味を含んでいる。それが証拠に、以前にも又以後今日迄、今だにここを越す規模の堅穴は発見されていない。

我が関西大学探検部洞窟班の進歩が足跡となってこの洞窟に踏み記されているのである。

「ルート66 (ROUTE 66)」

まず洞口より梯子で降下し始める所である。大抵の人は、巨大な生き物が口を開け、今にも吸い込みそうな洞窟の入口を見るとすくむであろう。しかも、洞内より周期的に異様なガスを吹き出すのである。

ここは65mの深さであるが、言葉のニュアンスが「66」の方が良いので「ルート66」と名付けた。傾斜は垂直でなく、荷物の降下、引揚げ、ザイルをダウンする時などに、梯子やテラスによくひっかかるので、第1次～第3次ではこの少し出たテラスに6～8時間立つこともあった。行動出来る範囲が狭く昼半量ほどで、それに落石もよくある所で大変に危険である。じっとしていると寒さも加わり、何回も尿をもよおし困ったことがあった。また、このテラスに長時間立っていると、どんな音痴の人でも歌を唄い出すという不思議な現象が起こる。

「田海ゲレンデ (TOMI GELANDE)」

第Iホールを言い、そこには大きな雪渓が横たわっている。その大きさは畳100枚程の広さで、しかも万年雪である。そして約30度の傾斜があり、スキーの滑降には丁度良い様である。人工スキー場よりも余程良さそうで、しかも天然の天井がある。ただ真暗闇であるのが難であるとか……。

以上のことより、田海にあるスキーゲレンデ「田海ゲレンデ」と呼ぶことにした。なお、

田海とは、青海町田海という地区を表わしている。この田海ゲレンデを下部から見上げると、洞口よりの光が青く、波打つ雪溪に反射して素晴らしく美しい様相を呈している。

「ドビー (DOBI)」

変な名である。本当の英語では「Lobby (ロビー)」であるが、隊員の中にある地方のなまり (方言) をしゃべる者がいて、彼は「ロ」を「ド」と「ザ」を「ダ」、「ゼ」を「デ」と発音するので、「ロビー」が「ドビー」となまったのである。また「ダイルダウン (ザイルダウン)」 「デンプ (全部)」などと発音する。

ここからは70mの滝のFとの連絡を待ったり、昼食をしたりする。いわば休憩室の様な所である。しかし、温度が5℃なので、じっとしていると大変寒い、一いや冷たいのである。1本のロウソクで暖を取りながら、恋愛話をしたり、人生論をしんみり語り合ったことを私は覚えている。又、変称「エンヤトットの場」もここである。

「孤独の滝 (KODOKU.NO.TAKI)」

パジャ、パジャ、カタカタカタ……。昇降の時、自己しか頼ることができないところから、我々はここを「孤独の滝」と呼ぶ。冷水を浴びながら70mもの滝を昇降するには、体力的にも精神的にもその消耗が大変激しい。この名は実際にこの滝を昇降したものではないと、ピンとこないだろう。私もここを昇る時、幾度いやになり昇っては休み、昇っては休みしたことか。同じ調子の変化のない壁がだらだら続くのである。頼れるのは自己しかない。自分の手足を1つずつ動かすことが、ここを昇り切ることにすると自分に言い聞かせながら……。そして上に見える光の遠いこと。いくら昇っても着かない。しかも冷水は容赦なく身体を洗う。昇り切った時の喜び。ここで自分の体力に自信を持つのである。

「樞鳳の間 (KYUHO NO MA)」

我々のアタック基地となった所である。大きさは、80×40mの楕円形で、長い所では、一方から他の壁に向かって石を投げて壁造は達せず、跳ねかえる音がしない。ちょっとした屋根付きの野球場といった感じである。大変広くて静かなことより、「樞鳳の間」と名付けた。鳳が静かに眠っている所といった意味である。なお、鳳とは関大の意味をも含んでいる。

第4次調査の時、2次アタック隊が「地底の嵐」に会ったのもここであり、それ迄静かに眠っていた鳳が、我々の鼓動に気が付き、いかって暴れ出したのかも知れない。

また、ここでキャンプをした時も、何かのうなり声が聞こえるのも変な現象である。これは70mの上から流れる滝の水が、附近の大気を巻き込み、音を発するのであろう。

キャンプ中、方向を間違え、目的と違った所へ行った者もいたというエピソードもある。

洞内名称

「ルート0 (ROUTE0)」

第4次調査の2次アタックの時、水がつまりアタックを断念させ、引揚させた場所である。ここは、洞床も天井も共に約2.5度の勾配で下へ傾斜し、それから同勾配で上がっているV字型の通路となっている。しかも天井と洞床との間が0.5mしかなく、我々はここを身をかがめ、よじり苦労して通り普段は水はないが、70mの滝などの水量が増えると、水まり、サイフォン式になって我々の行く手をこばむ。狭ことより、正数の最小値0をとり「ルート0」と呼ぶ



「ルート881」

柩鳳の間よりの横道別れ、ぐるっと回り本いた時、2人の隊員が戻って来ないので探ぬうと現われ、2したとたん「ヤバたことより名付けた。

「1」という言葉は、第3次調査の活動中に、ちょっとりした時に無意識に「ヤバイ」と発した流行言葉で「夫婦岩 (MEOTOIWA)」

ここには岩の塊や落木がごろごろ転がっている。五殺坂隊員の中に「夫婦岩」とい苗字の人がいたので、このここにある大きな岩2つに縄を張り、伊勢の夫婦岩のようにしよーモアより、この名がついた。第3次調査の最終到達地点である。

(ROUTE 881)」

の途中にある支洞のことで、途中から支洞が洞へもどる。最初にここをアタックして別れ偵察に出かけ、1人がなかなかしていると、途中の横の支洞より

人が顔を合わ

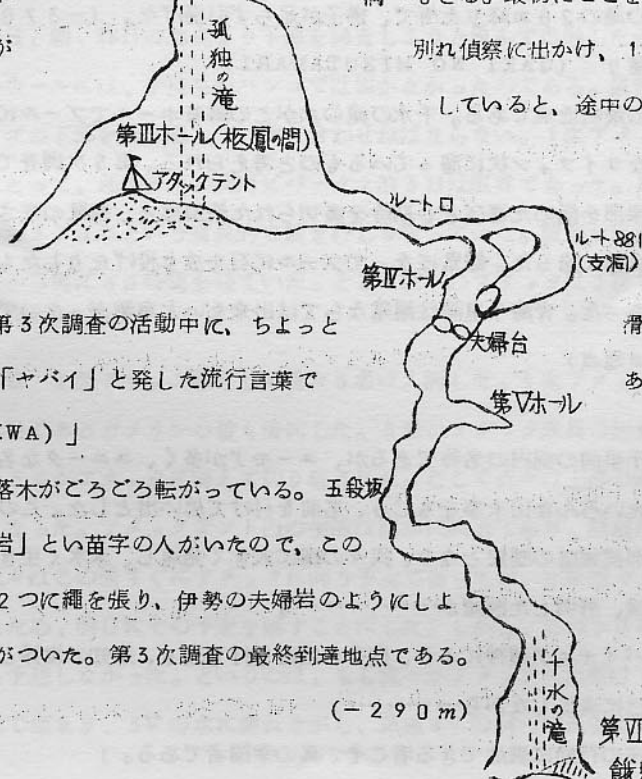
「1」と言っ

この「ヤバ

滑ったり転んだある。

名を拝借し、

うというユ



(-290m)

第VIホール
餓鬼の水溜り
(最深部)

「五段坂 (GODANZAKA)」

第Ⅰホールの「チムニー」と同じ様になっていて、数段の階段状になっている。ここは、上からの降水により壁が滑らかで、ロッククライミングもやりにくく、また梯子を掛けても傾めのオーバーハングとなりとても昇降し難い所である。私は初めてここをアタックした時、梯子もザイルも使わずに攀りて、いざロック・クライミングで昇ろうとしてホールドがなく、昇っては滑り落ち、昇っては滑り落ちしてもう昇れないのかとあきらめかけたことがある。私の一生の終りとさえ一瞬感じたものである。おまけに全身に水を浴び、上にいる者に声をかけてザイルを降してもらおうとしても、声は水の音にかき消され届かない。私はここをどのようにして昇ったのか、今だに思い出せない。必死の思いで岩にすがり、気が付いた時は上に着いていた。以後、ここには梯子をかけている。

「千水の滝 (SENSUI NO TAKI)」55 mあり、上からは水が滝のように降り、いやが応でも水をかぶる。この水が多いことよりの「千水」と、降水の為に、行者の様に身体を洗い清められることよりの「洗水」とをかけ、「千水の滝」と名付けた。尚、「千」は千里ヶ丘ということも含んでいる。下は摺鉢を伏せた様に末広がりとなり、第Ⅴホールに続く。第4次調査の最終到達地点がこの滝の20 m降りた所で、梯子が足らず引揚げた。(－370 m地点)

「餓鬼の水溜り (GAKI NO MIZUTAMARI)」

青海千里洞の最終地点である。千水の滝の水がこの第Ⅴホールでプールになり、ここより水はルート0の様なサイフォン状に溜っているものと考えられる。第5次調査で、私達がここに降り立った時、最深部を極めた喜びと、期待を裏切られた絶望感と、濡鼠の寒さで、どうしようもない異常な精神状態に陥った。餓鬼になってプールに石を放り投げたりしたものだ。そう、私達は確かに餓鬼であった。青海千里洞は餓鬼ならではの出来事だったのである。

(－405 m地点)

以上が青海千里洞の洞内の名称であるが、ユーモアが多く、ユニークな名前ばかりとなった。活動中に起ったいろんな出来事をもじり、名前を付けて思い出とした。この青海千里洞は、我が関西大学探検部洞窟班の歴史となり、我々の様に大きく発達し、末永く生き続けるであろう。この我が手で探検、解明した洞窟が……………。

今後、関大パイオニア精神により、幾多の困難を打ち破り、未知の世界との融合を求め続けるであろう。自己に満足しながら……………。

「自己の現在の行動に満足できる者こそ、真の幸福者である。」